

## 「終末信仰」

2014年05月09日

「東京新聞」は毎日「本音のコラム」を連載している。

8日（木）に法政大学の竹田茂夫教授が興味深いコラムを寄せているので、紹介したい。ある哲学者が人間の行為や社会の意味を調べるために思考実験を試みた。それは、自分が死んでから一か月後に、全人類が絶滅することが分かっていると、人はどのような振る舞いをするかという実験である。文化や科学は目的を失い、道徳やルールに従う意味はなくなり、虚無と絶望に陥るだろう。自分の死の先に、人類の将来があると信じるから、今日が生きられる。この確信が利己主義、刹那主義、国家主義への反駁を生み出す。

竹田教授は、この思考実験には足りない二つのことがあるという。一つは、人は未生の子孫への配慮や責任だけではなく、やってくる破局から目をそらし、現状維持を図る自己欺瞞がついて回っている。それは、度重なるバブル経済や原発推進の主張や、地球温暖化への無関心にみることができる。もう一つは、人を突き動かすのは、戦争や事故で死んだ者への共感である。犠牲者は生き返らない。しかし、彼らの無念な思いが、生きている人間の激しい行動によって制度変革に結びつくことがある。将来、必ず変革するという強い思いは大きな力になる。

竹田教授の「コラム」を読んで、クリスチャンはマルチン・ルターの「明日、地球が滅びようとも、私は庭にリンゴの木を植える」という言葉を思い出すだろう。

私は、現在の人類の歩みは滅亡に向かっている、もはや避けられないと悲観的に思うことが多い。ある方が次のように語っていた。人類の滅亡は必定である。滅亡した後、新しい人類が起こるであろう。その新人類に、滅亡していく中で、教会は何を語り、何をなそうとしたかを書き残しておく必要がある。聞いて、ギョツとした。しかし、この思いが、その人の今を生かしているのであろう。

聖書は歴史の終わり、終末があると告げている。神が天地を創造し歴史を始められたのであるから、当然終わりもあるという論理である。それを、主イエスが雲に乗って「再臨」すると神話的な表現で書いている。主イエスの再臨による歴史の終わりは、神がその人の生き方によって右と左に分ける恐怖の裁きであるとも書いているが、信仰者には全き救いが与えられる歴史の完成である。ヨハネ黙示録の最後は「『然り、わたしはすぐに来る』アーメン、主イエスよ、来てください」と待望する言葉で結んでいる。歴史の終わり、終末は神にまみえ祝福に与る喜びである。

この終末信仰は理性から見ると、とてつもないバカげた信仰であろう。しかし、私は信じている。完全な救いに与る終末があるから、今が生きられる。どんなに暗黒であろうとも、光の明日が約束されている。だから、悲観を乗り越え、大いなる楽観とユーモアをもって生きる道が示されるのではではないか。信仰は、このような理性と時空を超えた望みにかけることである。